



歓迎会時集合写真(後列右端は著者の村田氏)

大学病院薬剤部での薬剤師業務、病院と薬学部・医学部の連携、そして実験室で行われているユニークな科学研究を紹介し、様々な項目に挑戦・体験してもらいました。

〔1日目〕 本学の高柳理事長と大野学長による歓迎の挨拶より始まり、大学施設案内の後に、臨床薬剤学教室・鈴木講師と金野助教によりフイジカルアセスメントを中心とした薬学部教育の取り組みが紹介されました。実際に本学学生が実習している人形を使用した聴診・血圧測定・筋注などの項目を体験しました。

〔2日目〕 場所を大学病院薬剤部と医学部に移し、岡田薬剤部長、渡邊助教の説明のもと、薬剤部や各病棟での薬剤師業務について見学しました。昼食時には宮城県の特産品で彩られたお弁当を楽しみながら、現役薬剤師や本学学生・大学院生も参加して和気あいあいとした雰囲気での意見交換会が行われました。特にお互いの国の薬剤師をはじめ医療職の現状について議論が深まりました。午後には宮城大学との多職種連携教育IPEの取り組みなどを見学しました。

〔3日目〕 科学技術交流として当プログラムの柱の一つが、モンゴル薬用植物の成分薬効解析研究の紹介です。生薬学教室・佐々木教授による「日本の漢方薬・生薬・地域特産物の研究」の講義の後、共同研究の課題植物を題材に、薬効成分を単離精製する実験方法を学びました。

〔4日目〕 植物成分の化学構造決定手順について、実際にデータを読み解きながら理解を深めました。本学に在籍するモンゴル国出身の研究者や留学生の協力もあり、充実した意

2025年1月、モンゴル薬科学大学から学生・大学院生・若手教員12名を招き、科学技術振興機構(JST)「さくらサイエンスプログラム」A・科学技術体験コース」のプログラムを実施しました。

タイトルを「モンゴルー日本薬学交流」と銘打ち、本学薬学部で学生や大学院生が普段受けている先進的な教育プログラムや、

薬学の将来性考える

モンゴルと日本の大学間交流



村田 敏拓 (東北医科薬科大学薬学部生薬学教室准教授)

東北医科薬科大学の活動報告

科学技術振興機構『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

Ⅱ 特別連載Ⅱ

第438回

プログラムスケジュール

1日目	来日、概要説明
2日目	薬学教育カリキュラムの紹介 フイジカルアセスメント実習の体験 (小松島キャンパス)
3日目	病院薬剤部・病棟・医学部見学 意見交換会(大学附属病院・福室キャンパス)
4日目	日本の漢方薬・生薬について講演 (小松島キャンパス)
5日目	薬用植物の成分薬効解析方法について 研修と体験(小松島キャンパス)
6日目	モンゴルの環境課題について講演(東京大) 小石川植物園見学
7日目	帰国



大学附属病院薬剤部の見学



フィジカルアセスメント実習



小石川植物園で寒桜の花を撮影する。大学の参加者の皆さんはしっかりと胸に刻んでいます。



モンゴル国薬用植物から得た化合物の化学構造解析に挑戦する。本学とモンゴル薬科学大との大学間協定や新たな共同研究の話も上がっており、人々の健康と医療に資する教育・研究活動を展開することを両大

見交換が進みました。  
〔5日目〕プログラム終盤は仙台から東京へと移動し、東京大学農学研究所・大黒教授による講義を受講しました。モンゴルでも深刻化している砂漠化や薬用植物を含む環境保全の課題について、招へい者の皆さんは真剣に聴講していました。また東京大学、京都大学、農研機構をはじめ、本学も参画している草地球回復を目的とした地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS事業) の活動についても紹介がありました。  
講義の後に訪れた小石川植物園では、モンゴルに自生し、日本でも重要な薬用植物などを観察しました。1月にも関わらず咲いていた寒桜の花に、「さくらサイエンスプログラムで桜が見ることができた！」と一同喜んで、あつという間に写真に収めていました。  
薬科学大学のみなさんは振り返ります。体験を中心にハードな行程となりましたが、聞くこと「非常に楽しく充実していた」「今後もこの経験を母国での学習や仕事に活かしたい」「交流をより緊密に、かつ継続的に続けたい」「是非また日本に来て勉強したい」との感想が聞かれました。日本側担当者にとって、学内外のみなさまの温かい協力のもと数多くの経験を積みました。  
修了式では、吉村薬学部長より「本プログラムに参加された皆さんが、本学とモンゴル薬科学大学、そして、日本とモンゴルの架け橋となっていただけだと大変嬉しく思います」と激励の言葉が贈られました。今後もこの良好な関係を軸に、交流と共同研究を進展させたいと思います。

●薬学教育・研究の発展胸に  
医薬品を扱う人材や開発の担い手の育成を共通点とする両大学。今回、大学院生や学生に加えて、薬剤師や医師としても活躍する若手教員も交流する大変貴重な機会となりました。帰国後に実施したアンケートでは、病院薬剤師の病棟業務やチーム医療への参画・フィジカルアセスメントの試みなど、日本では薬剤師が患者と関わる機会が多く、そしてこれに対応した教育カリキュラムが組まれている点に対して感嘆の声が寄せられました。また双方から、両国の制度の違い、薬学教育の問題点や医療従事者の課題について意見交換会で議論できたことが、医療の高度化とAI活用のすう勢のなか、薬学の将来性・発展可能性をより真剣に考えるきっかけになったとの声がありました。  
研究・技術面に目を向けると、モンゴルには日本でも漢方薬構成生薬として知られるカンゾウ、シヤクヤク、マオウの基原をはじめ、数多くの薬用植物が自生しています。今後、両大学がお互いの強みを持ち寄って、それら資源の解析を進めることが、医薬品として利用する全ての方に恩恵をもたらすことを確認しました。